

アクセス・フォー・オールシンポジウム2026

シンポジウムテーマ 「誰もが『見る』という機会と選択肢を サッカー界の当たり前」



左から岩田、千原、宮本会長、日比野リーダー、青山氏、小森氏

日本サッカー協会（JFA）は4月22日、オンラインで「アクセス・フォー・オールシンポジウム2026」を開催した。当日は都道府県サッカー協会や日本障がい者サッカー連盟、Jリーグ、WEリーグ、Fリーグなど関係者ら145人が参加。“誰もがサッカーにアクセスできる社会”の実現に向けて国内外の取り組みを共有した。

欧州で当たり前に進む 観戦アクセシビリティの向上

JFAは2023年3月、JFA、

9地域・47都道府県サッカー協会、各リーグ、加盟団体を構成メンバーとするアクセス・フォー・オール（AfA）ワーキンググループを立ち上げ、翌24年4月に「アクセス・フォー・オール宣言」を行った。シンポジウムは昨年4月に第1回を開催し、今回は2回目となる。

今年のシンポジウムのテーマは「誰もが『見る』という機会と選択肢をサッカー界の当たり前」。観戦アクセシビリティ（誰もがアクセスでき、快適に楽しむための環境整備）やスタジアム観戦機会を

創出するための施策などについて、JFA、Jリーグの担当職員がそれぞれの取り組みを紹介するほか、海外での取り組みや障がいのある当事者からの意見も共有された。

冒頭、宮本恒靖JFA会長は「AfAは、JFAのサステナビリティ戦略を支える取り組みの一つ。スタジアムはサッカーの価値が最も体現される特別な場だからこそ、そこでの体験は誰にとっても開かれたものであるべき。現場では何が課題となっていて私たちに何ができるのか、具体的な議論を深める時間になることを期待している」とあいさつ。続いてJFA経営企画部の高埜尚人部長が登壇し、「あらゆる場面に存在する障壁を取り除くことが『アクセス・フォー・

オール』という行動指針の本質」とし、「今日はさまざまな取り組みを知ってもらい、自分たちの現場で変えられることがあるか、考える時間にしてほしい」と呼び掛けた。

AfAワーキンググループの日比野暢子リーダーは、欧州の観戦アクセシビリティについて報告した。

日比野氏によると、欧州では「見る権利が保障されており、障がいのある観客へのサービスもガイドラインが提示されている。各クラブには観戦アクセシビリティを向上させるための担当者「ディサビリティ・アクセス・オフィサー（Disability Access Officer：DAO）」が置かれ、欧州サッカー連盟（UEFA）もDAOの配置をクラブライセンスの要項に定めて

いる。観戦チケットの購入について、まず各クラブのウェブサイトに、障がいのある人を対象にしたチケット販売情報が明記されている。そこで障害者手帳などの証明書類を提出して会員登録することで障がい者向けのチケットを購入できる。

アヤックス（オランダ）やACミラン（イタリア）の車椅子席や視障がい者向けの席は、ピッチに近い位置に設置され、バリアフリー対応によってスムーズにアクセスできる。緊急時には速やかに避難できるように松葉杖をつくげをした人にも動線が確保されている。一方、マンチェスター・シティ（イングランド）では、家族や友人のうち1

<プログラム>

- あいさつ／宮本恒靖JFA会長
- JFAサステナビリティ戦略におけるアクセス・フォー・オール／高埜尚人JFA 経営企画部長
- 国内外の事例／運用やソフトでアクセスを高める取り組み
 - ・アクセス・フォー・オールとしてみる「見る権利」の国内外の動向
 - ：日比野暢子JFAアクセス・フォー・オールワーキンググループリーダー（桐蔭横浜大学教授）
 - ・当事者として
 - ：岩田朋之JFA経営企画部 サステナビリティグループ（ロビジョンフットサル選手、理学療法士）
 - ・JFAの取り組み
 - ：千原和代JFA競技運営部 チケットینگ・プロトコールグループ
 - ・Jリーグの取り組み
 - ：青山優香Jリーグ サステナビリティ部、小森誠之Jリーグ マーケティング事業本部 マーケティング部
- パネルディスカッション「確実に“見る”を届けるために私たちができること」
 - ファシリテーター：日比野暢子
 - 【登壇者】千原和代JFA競技運営部
岩田朋之JFA経営企画部
青山優香Jリーグ サステナビリティ部
小森誠之Jリーグ マーケティング事業本部 マーケティング部

■アクセス・フォー・オール宣言（2024年4月）

Access for All

グラスルーツからエリートまで誰もがサッカーの「する」「見る」「関わる」にアクセスできる多様な「機会」と「選択肢」を持続的に確実に届けます。



上記を実現するために、

- ①日本サッカー協会は、各リーグや9地域47都道府県サッカー協会、および各種加盟団体と共に、サッカーを愛するすべての人が全国の日常でサッカーにアクセスし、サッカーを楽しむ挑戦できることをサッカーファミリーの「あたりまえ」にしていきます。
- ②サッカーを通じて、ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン（DEI）※を推進し、日本のスポーツ文化に変化を起こします。
 - ※ダイバーシティ Diversity（多様性）、エクイティ Equity（公正）、インクルージョン Inclusion（包括性）、3つの頭文字をとって「DEI」とする

■「アクセス・フォー・オールハンドブック」

（2025年4月発行）

https://www.jfa.jp/about_jfa/accessforall/img/AfA_handbook_2025.pdf



- 「Jリーグ国立競技場車椅子席統一運用ガイドライン」
 で実現できたこと
 車椅子席ユーザーの利便性・観戦体験の向上
- ▶メイン、バック、ホーム側ゴール裏ビジター側ゴールを選択できる。
 - ▶初めてのスタジアムでは席を選択しにくい、自由席であれば障がいや麻痺の状況によって臨機応変に席を選べる(当日の変更も可能)
 - ▶家族や友人と並んで観戦がしやすい(本人、介添えだけでない同伴者との観戦)

入りやサポートスタッフの増員、備品レンタル費用の増加といった課題も挙げた。

チケット価格や発券方法改善できるところから

最後に登壇者によるパネルディスカッションが行われた。日本代表の試合では、全カテゴリーの席種に障がい者席が設置されている。日本代表戦のチケット価格設定について問われた千原は、車椅子席を最も安価な一般席と同一価格に設定し、車椅子席エリア内であれば、どのカテゴリーの席でも同じ価格で購入できるようにしたと説明した。その背景として千原は、「岩田から『障がいがある』とは個人の状態によるものではなく、

社会に障がいがあるため、それが壁になっていると考えることができる」という考え方を伝えられたという。車椅子席は一般席に比べて観戦場所の選択肢が限られることと自身が社会側の障がいであり、選択肢が少ない中で価格が観戦の妨げにならないよう、料金を最も安価な水準に統一する判断に至ったとした。

また、それぞれの障がい者席を整備する際は「当事者の話を聞き、理解を深めながら進めていった(千原)。たとえば、視覚障がい者席の場合、ボールを蹴る音や選手の声が聞こえるようピッチ近くの前座を用意し、自分のスマートフォンとイヤホンを使ってライブ実況を聞けるシステムも整備した。岩田は「千原さんから競技運営部と対話し、実際のスタジアムを視察しながら、小さな改善を積み重ねている」と話し、発達障がいや知的障がいの子どものたちやその保護者が安心して観戦できるエリアを設置したり、試合終了後に車椅子ユーザーがスタジアム内のエレベーターを優先的に使えるように手配したりしたことなど、JFAの取り組みを紹介した。

次にJリーグの運用について尋ねられた青山氏は、「スタジアムに来てくれる人がいる一方、来るこ

ができている人もいない。われわれが対応できていない障がいのどこにフォーカスを当て、アプローチしていくかを今後は考えていく必要がある」と課題を挙げ、小森氏は「Jリーグとしては全60クラブ、60地域でできる形を模索しなければならぬ」と話した。Jリーグの試合でも企業の協力によって、スマートフォンとイヤホンを使ってライブ実況を聞ける「おもてなしガイド」を導入している。小森氏は「今後は同時通訳で英語にして、海外の方向けのサービスにも使えるかもしれない」と述べた。

またJリーグでは、デジタル障害者手帳のスマホアプリサービスを提供している企業の協力の下、同アプリから障がい者割引価格のチケットを購入できるサービスの導入も進めている。従来は一般価格でチケットを購入し、スタジアム窓口で差額の返金手続きをするやり方だったが、人手や手間がかかることに加え、障害者手帳の種類が多く判別が難しいという問題もあった。小森氏は「障がい者割引価格のチケットをオンラインで購入できればスタジアムでの入場を削減でき、来場者の手間も省ける」と話した。

[MESSAGE]
日比野暢子
 JFAアクセス・フォー・オールワーキンググループリーダー

「JFA2005年宣言」では、2050年までに「サッカーファミリーが1000万人になる」ことを約束しています(JFAの約束2050)。しかし、サッカーにアクセスできていない人はまだ数多くいます。その人たちはどのような人で、なぜサッカーにアクセスできないのか、共通する課題は何か。それらを解決するためには「サッカーを届ける(デリバリーする)」という考え方が必要なのではないか——。そうした多くの議論を経て、2024年4月のアクセス・フォー・オール(AfA)宣言では「グラスルーツからエリートまで誰もがサッカーの『見る』『関わる』にアクセスできる多様な『機会』と『選択肢』を持続的に確実に届けます」をステートメントに掲げました。

2025年には、AfAをより理解してもらえるようハンドブックをリリースし、第1回シンポジウムを開催。2026年はワーキンググループで議論を重ね、「障がいのある方の観戦アクセシビリティ」をシンポジウムのテーマとしました。欧州では障がいのある観客に対するガイドラインが整理され、さらにはクラブライセンス条項にディスアビリティ・アクセス・オフィサー(DAO)の配置が義務付けられるなど、クラブそれぞれに特色がありながらも観戦アクセシビリティを標準化する動きがあります。一方、日本では「見る」機会の確保と選択肢は十分ではありません。サッカー観戦するためのちょっとしたアイデアを障がい当事者の声を踏まえて共有する場としたいと考えました。JFAがハブとなり、サッカー界が丸となって情報をシェアしていけば、「JFAの約束2050」に一步近づけるはず。今回のシンポジウムが、そのキックオフとなることを期待しています。

AfAは障がい者のみが対象ではありません。サッカーファミリーの皆さんと共にAfAをサッカー界の日常の当たり前にしていけば、仲間はずっと増えていきます。みんなでそうしたサッカー界を目指していければと思います。

増えている。JFAのインクルーシブプログラムにはみずほフィナンシャルグループが協賛し、「JFAインクルーシブプログラム supported by MIZUHO」として実施している。千原氏は「協賛に関心を示す企業が出てきている。続けることが大切」と語った。

今回のシンポジウムを終え、日比野氏は「これを一つのきっかけにして今後も皆さんと交流し、好事例をシェアしていきたい」と期待を寄せた。

■日本代表戦における視覚障がい者向けの
 実況解説(JFATV)

https://www.youtube.com/watch?v=rvdKtTa0_5M


